

品目	干害・用水不足対策（1月）	
野菜	露地野菜の栽培管理	<ul style="list-style-type: none"> ・生育が軟弱徒長傾向の場合は、防除時期を早め、「主要農作物病害虫・雑草防除指針」の農薬使用基準に沿って防除する。 ・結球期を迎えている冬レタスは、水源が確保できる場合、畝間灌水を行う。 水源の確保が困難な場合は、10aあたり1t程度の水を確保して、株間に灌注器を用いて用水灌注を行う。 用水灌注ができない場合は、晴天の午前中にトンネル内のレタスの葉上に動噴で散水して、結球を肥大させる。 ・定植時期を迎えている春レタスは、定植直後の灌水は最低限実施する。これから定植する場合、早めに畝立て整地後、降雨を待ってマルチ被覆を行い、定植までに肥効が発現できるようにするため、早めの作業計画に変更する。 ・収穫期を迎えているブロッコリーやナバナは、肥効が低下すると、開花が促進され商品価値を失うので、葉色が薄くなっている場合は、速効性の肥料の追肥と灌水を行う。 ・定植時期を迎えている春ブロッコリーは、定植直後の灌水は最低限実施する。これから定植する場合、早めに畝立て整地後、降雨を待ってマルチ被覆を行い、定植までに肥効が発現できるようにするため、早めの作業計画に変更する。 ・ニンニクとタマネギは追肥を施しても、水分がない場合は肥効が現れない。この時期が花芽分化にあたり、肥切れにより「とう立ち」や二次成長の原因になるので、灌水を行う。 水源確保ができない場合は、追肥した肥料が隠れる程度の土入れを行い、肥料の分解を進める。
	施設野菜の栽培管理	<ul style="list-style-type: none"> ・少雨乾燥条件下では施設内が低湿度になったり、培地の水分値が低くなるおそれがあるので、作物体の状態を常に注意し、こまめに灌水する。 ・原水を上水道にしている養液栽培施設では、上水道の減圧や時間給水などの情報に常に注意して、予備タンクを準備するなど原水確保に努める。 ・施設内が乾燥すると、果菜類では比較的低湿度を好むうどんこ病が、イチゴではハダニ類が発生するおそれがあるので、「主要農作物病害虫・雑草防除指針」の農薬使用基準に沿って防除する。 ハダニ類の防除薬剤は作期中に1回しか使用できないものがあるので、使用薬剤の選定には注意する。 ・トマトの土耕栽培では、培地が乾燥すると尻腐果の発生が懸念されるので、カルシウムを含む微量要素肥料を葉面散布する。
果樹		<ul style="list-style-type: none"> ・土壌の乾燥と大気中の乾燥により、地下部と地上部ともにストレスを強く受けている場合は、可能な限り灌水や防風対策に心掛け、樹体へのストレスを軽減させる。 ・乾燥状態が続く場合は、定期的に灌水する。 ・苗木や着果している甘夏やポンカン系統（不知火等）では、最優先で灌水する。 ・水の確保量が不十分であれば、細根が多く分布している部分へ集中的に灌水するか、土壌表層に溝を掘り、その部分へ灌水する。ドリップチューブによる点滴灌水法が効果的である。 ・除草を兼ねて管理機で地表面を軽く中耕しておく、土壌を膨軟にして通気性が良くなる。 ・開花期間中を除き、柑橘類、ブドウでは発芽や新梢の生育不良を避けるため、可能な限り灌水する。
花き		<ul style="list-style-type: none"> ・冬期の渇水は晴天が多い裏返しであり、花を咲かせる種類の花きにとっては日照不足の心配がなく、水不足を除けば、好条件につながる。低温時期のため、蒸散作用は緩慢であるが、それでも最低必要量の用水を供給しないと生育に支障をきたすので、以下の対策を行う。 ・節水する場合は、回数減らしても一回当たりの灌水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。 ・栄養生長期の水不足は生育に大きく影響するが、収穫間近になれば影響は小さいため、生育ステージによって節水量を加減する。 ・マルチをして土壌からの水分の蒸発を防ぐ。 ・施設栽培では、品質低下につながるのを、密閉しない。
畜産		<ul style="list-style-type: none"> ・減圧による給水制限を想定して、必要であれば貯水タンクを準備するとともに、節水対策として飲水器からのこぼれ水を防止する。 ・畜舎や施設を洗浄する場合は、消毒の効果に支障をきたさない範囲で、水洗に用いる水量を最小限に抑える。

- ・水洗の前に洗剤を散布し、できれば高圧洗浄機を用いる。
汚れがひどいところはブラシ等で擦り洗う。
- ・消毒液を調製する場合は、薬剤の容器に記載されている用法・用量、使用上の注意をよく読み、適正な希釈倍率にする。